

世界中の一流ブランドが集う日本最高峰の舞台『東京コレクション』に4回連続出品している田代淳也さんのファッションショーが5月31日、佐賀市歴史民俗館（旧古賀銀行）で行われました。

中世ヨーロッパをイメージした優雅でクラシックなシルエットが特徴で、自然派アーティストとしても注目される田代さんは、多久市出身の服飾デザイナー。故郷での初開催となった今回のショーは、『composition』と題し、黒のシルクと白のコットン素材にしたもので話題を呼んだ今春の東京コレクションを再現したものの。佐賀市出身のフルーツ奏者・福井恵利子さんとのコラボレーションで、フルーツのBGMと明治時代に建てられた洋館の風情がトップデザイナーの感性と融合し、ファンタジックで華やかに田代イズムが披露されました。

田代さんは、「大反対を押し切って、この世界に飛び込んで6年。4回の東京コレクション出品や経験と共に自信の中で、生まれ育った佐賀のみなさんに世界レベルのショーを見てほしかった」「着心地よく、5年後、10年後に古くなるというのではなく、着込むほどに馴染み、よい風合いや味を出し、着る人と共に成長する服を作ることがブランドコンセプト。麻や綿などの天然素材に草木染めで表現したり、裁断した生地も無駄にしないなど、素材や物を生かすメッセージ性を込めたものや、ナチュラル感プラス高級感で、素材の美を表現するコレクションです」と。また今度は「自然に親しんだ子供の頃のような遊び心を忘れず、新たな表現に向き合い、喜びを分かち合える仲間と継続していきたい」と抱負を語られ、大盛況だった今回のショーを手応えに多久での開催実現にも意欲を示されました。

ふるさと佐賀で世界レベルのショーを実現

田代淳也さん初の里帰りファッションショー

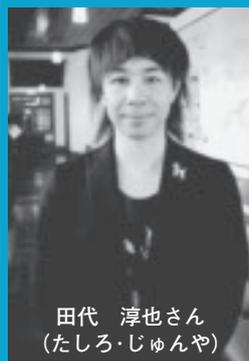
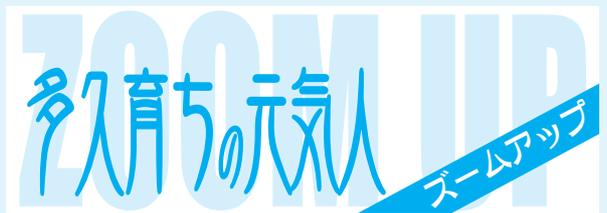


■立見客を含めた約350人の観客が釘付けになったファッションショー & フルーツリサイタル



■多久で採取した草木で染め仕上げられた白いコットン素材のドレスと光の加減でカラーバリエーションが豊かなモノトーンの黒のシルクの洋服。風に揺られ、人が歩いてできるラインなど、自然の中でこそ出る持ち味が表現されました

「僕、都会の雰囲気は苦手な…。多久はいいですねえ。週末は、家族が住む多久に帰り、のんびりと充電する時間は大切に、ふるさとで洋服作りのヒントになるエネルギーをいっぱい吸収するんですよ。小さい頃、虫を取ったり、魚釣りをしたり、たくさんの自然とふれあったことや、サラリーマン時代の人との出会いなど、佐賀に居た頃の経験が役立っています」と、ふるさとを慕う田代さん。



田代 淳也さん (たしろ・じゅんや)

1974年多久市北多久町生まれ。27歳で脱サラして、服飾専門学校でデザインの基礎を学び、アパレルメーカーでの企画デザインを経て独立。2004年9月、「JUNYA TASHIRO」をスタート。2005年6月、福岡市中央区清川にアトリエ「Himitsukiti (ヒミツキチ)」設立。翌年9月、日本最高峰の舞台であるJFW東京コレクションに初出場。高い評価を得て、3シーズン連続参加中で、今秋9月も発表予定。東京を拠点にするのが常識の東京コレクションデザイナーの中で、地方から乗り込む異彩を放つデザイナーとして注目度も高い。服に合わせる帽子やアクセサリーのデザイナー、ヘアメイクをサポートする仲間も福岡で活動中、モデルも九州出身者ばかり。福岡を拠点に全てを九州発信にこだわる。この数年のブランドテーマは「ナチュラル+α」ナチュラルに様々な要素を取り入れ展開。デザイナーを目指す多くの人の憧れの存在となっている。強い結束力で生まれた数々の作品は、全国40か所の店やインターネットでも販売され、今回のファッションショーで披露された黒のシルク作品は、今秋販売される新作。幅広い年代の客層からのオーダーに応え、今期からウエディングドレスを手掛けたり、メンズウェアもスタートさせた。